奈 病 防 第 1 号 の 5
令 和 3 年 9 月 1 日
奈良県病害虫防除所長

令和３年度病害虫発生予報　第５号（９月予報）の送付について

今月の発生に注意を要する病害虫

作物名	病害虫名	発生時期	発生量
水稲	いもち病	平年並	やや多い
	トビイロウンカ	平年並	やや多い
カンキツ	黒点病	やや早い	やや多い
カキ	炭疽病	やや早い	やや多い
ナス	褐色腐敗病	平年並	やや多い
	うどんこ病	平年並	やや多い
イチゴ	炭疽病	平年並	やや多い
ネギ	ネギハモグリバエ	平年並	やや多い
	シロイチモジヨトウ	平年並	多　い
キク	褐斑病・黒斑病	平年並	やや多い
イチゴ、ナス	アブラムシ類	平年並	やや多い
野菜類 花き類共通	ハダニ類	平年並	やや多い

○気象予報（近畿地方の１ヶ月予報：8/28～9/27）

気温：ほぼ平年並　降水量：ほぼ平年並　日照時間：ほぼ平年並

○今月の農薬適正使用のポイント

①アブラナ科野菜を間引き菜で収穫する場合は、農薬製剤ラベルに記載された使用上の注意事項をよく読んで、間引き菜で使用できる農薬を使用しましょう。

②農薬のラベルに記載された適用作物名について、思い込みや読み違いによる誤使用が起こる可能性があります。「トマトとミニトマト」、「ピーマンとシシトウ」、「実えんどうとさやえんどう、えんどうまめ」などは、いずれも農薬登録内容が異なります。このほかにも、判断に迷った場合には各農林振興事務所または病害虫防除所へお尋ねください。

６月１日～９月 30 日は農薬危害防止運動の重点実施期間です。農薬のラベル記載事項の遵守と使用履歴の記帳、ドリフト対策の徹底、薬剤の適正な保管管理等、農薬適正使用について指導の徹底をお願いします。

○今月の病害虫対策のポイント

９月は台風が多い季節です。強風による傷や降雨による湿度上昇は病害発生を助長します。台風接近が予想される場合は支柱の補強など事前に万全の備えを行い、通過後は障害部の除去や殺菌剤の予防散布などの病害対策を行いましょう。

Ⅰ．普通作物

１．水　稲

（１）いもち病

予報内容　　発生時期：平年並　　発生量：やや多い

予報の根拠

1) ８月下旬の巡回調査では、平坦地域での葉いもちの発生ほ場率は 20.5%でした。
2) 今後、天候不順が続くと発生が拡大する恐れがあります。

防除上の注意事項

1) 出穂後に穂いもちの防除を行う場合は、早めに実施し、遅くとも傾穂期までに行います。ただし、防除に際しては薬剤の収穫前使用時期を必ず確認してから行います。
2) ８月 20 日付けで、病害虫情報第４号を発表しております。詳細はそちらをご覧ください。

（２）紋枯病

予報内容　　発生時期：平年並　　発生量：平年並

予報の根拠

1) ８月下旬の巡回調査では、平坦地域での発生ほ場率と発病株率はそれぞれ 8.2%と 3.3%でした。中山間地域ではそれぞれ 4.9%と 0.5%でした。

防除上の注意事項

1) 中山間地域で多発した場合は、倒伏を避けるため、早めに収穫します。
2) 平坦地域で病斑が中位節間以上に進展した場合は、減収や倒伏の恐れがありますので、直ちに防除を実施します。ただし、防除に際しては薬剤の収穫前使用時期を必ず確認してから行います。
3) 多発ほ場では、収穫時に稲わらを持ち出して処分します。また、翌年は代かき時の浮遊菌核の除去や中干し時の薬剤防除を行います。

（３）トビイロウンカ（秋ウンカ）

予報内容　　発生時期：平年並　　発生量：やや多い

予報の根拠

1) 農業研究開発センター（桜井市池之内）の予察灯への飛来量は平年並です。
2) ８月中旬～下旬の巡回調査では、発生ほ場率 40%、株当たり平均発生頭数は 0.04 頭でした。広範囲に発生していますが密度は低く、平年よりやや多いですが、多発した昨年よりは少ない発生です。
3) 要防除密度（３頭/株）を超える水田は確認されていません。

防除上の注意事項

1) 念のため株元への寄生の有無を観察し、株当たり３頭以上の寄生や、「坪枯れ」の前兆の黄化を認めた場合には、早急に防除を行います。
2) 薬剤散布を行う場合は、トレボン乳剤、ＭＲ．ジョーカーＥＷ、エクシードフロアブルなどを、株元にかかるように散布します。ただし、収穫前使用日数に注意し、稲刈り直前であれば、薬剤散布せずに早めに稲刈りを行います。

２．大　豆

（１）吸実性カメムシ類

予報内容　　発生時期：平年並　　発生量：平年並

予報の根拠

1) 農業研究開発センター（桜井市池之内）の予察灯へのミナミアオカメムシとアオクサカメムシの誘殺量は平年並で推移しています。

防除上の注意事項

1) 子実肥大中期（９月中・下旬）までの加害は，子実の充実不良や変形粒となります。
2) 紫斑病予防と併せて、９月中旬と下旬の２回防除します。

（２）ハスモンヨトウ

予報内容　　発生時期：平年並　　発生量：平年並

予報の根拠

1) 農業研究開発センター（桜井市池之内）のフェロモントラップへの８月の誘殺数は、おおむね平年並で推移しています。
2) ８月下旬の巡回調査では、発生ほ場率 50%でした。

防除上の注意事項

1) 若齢幼虫期までに防除すると防除効果が高いので、加害部位の早期発見に努め、気づいた時には早めに防除します。

Ⅱ．果樹・チャ

１．カンキツ

（１）ミカンハダニ

予報内容　　発生時期：平年並　　発生量　：平年並

予報の根拠

1) ８月下旬の巡回調査では、寄生葉率は 7.5%と平年並の発生となっています。園による発生程度の差が大きくなっています。

防除上の注意事項

1) 同一系統の薬剤は連用を避け、抵抗性の発達を防ぎます。

（２）黒点病

予報内容　　発生時期：やや早い　　発生量：やや多い

予報の根拠

1) ８月下旬の巡回調査では、発病果率は 23%とやや多くなっています。一部多発園がみられます。

防除上の注意事項

1) 感染源の枯れ枝をできるだけ取り除き、処分しておきます。
2) ８月下旬～９月上旬が防除適期です。

２．ナ　シ

（１）黒斑病

予報内容　　発生時期：平年並　　発生量：平年並

予報の根拠

1) ８月下旬の巡回調査では、発病葉率は 5.6%でした。
2) 徒長枝上の葉に発病が目立っています。

防除上の注意事項

1) 徒長枝葉や花芽への感染を防ぐため、収穫後にアントラコール顆粒水和剤等で防除します。あらかじめ徒長枝を整理しておき、薬液をかかりやすくします。

（２）黒星病

予報内容　　発生時期：平年並　　発生量：平年並

予報の根拠

1) ８月下旬の巡回調査では、発病葉率は 5.0%でした。

防除上の注意事項

1) 収穫後の９月下旬～10 月に、キノンドーフロアブル又はオキシラン水和剤で防除を行い、翌年の伝染源となる芽基部への病原菌の感染を防止します。多発園では落葉期までに２回防除を行います。

（３）ハダニ類

予報内容　　発生時期：平年並　　発生量：平年並

予報の根拠

1) ８月下旬の巡回調査では、寄生葉率は 5.6%でした。

防除上の注意事項

1) 収穫時期ですので、防除する場合は収穫前使用時期等の登録内容に十分注意します。
2) 収穫期間にハダニ類が多発した場合は、収穫終了後速やかに防除を行い、越冬密度を低下させます。

３．カ　キ

（１）炭疽病

予報内容　　発生時期：やや早い　　発生量：やや多い

予報の根拠

1) ８月下旬の巡回調査では、発病果率は 1.6%とやや多くなっています。

防除上の注意事項

1) 発生園では発病果から健全果への二次伝染を防ぐために、発病果は必ず除去し、園外で処分します。
2) ９月上中旬（富有）の基幹防除を丁寧に行います。徒長枝が多い場合は整理し、薬液をかかりやすくします。また、発生園では基幹防除に加え、９月中下旬～10 月上旬に追加防除を実施します。
3) 台風や長雨後には、直ちに治療効果を有する薬剤で防除を行い、感染拡大を防止します。

（２）うどんこ病

予報内容　　発生時期：平年並　　発生量：平年並

予報の根拠

1) ８月下旬の巡回調査では、発病葉率は 7.5%でした。

防除上の注意事項

1) 気温の低下に伴い病勢が拡大します。富有で発生が多い場合、９月上中旬に防除を行います。

（３）フジコナカイガラムシ

予報内容　　発生時期：平年並　　発生量：平年並

予報の根拠

1) ８月下旬の巡回調査では、被害果率は 3.4%でした。

防除上の注意事項

1) 薬液がかかりにくい状態になっていますので、ヘタの裏側に薬液が届くように丁寧に散布します。収穫が近づいていますので、薬剤の収穫前使用時期に注意します。
2) 現在は、卵・成幼虫が混在し高い防除効果を得ることが難しくなっています。多発園では冬～春季の越冬期および初期防除を徹底します。

４．果樹共通

（１）カメムシ類（チャバネアオカメムシ・ツヤアオカメムシ・クサギカメムシ）

予報内容　　発生時期：平年並　　発生量：平年並

予報の根拠

1) 予察水銀灯によるチャバネアオカメムシの誘殺数は、８月後半以降増加しており、一部調査地点では 100 頭／日を超える誘殺数が確認されています。
2) 県内カキ 41 園地の巡回調査では、被害果率 0.2%とほとんど認められませんでした。県内８ヶ所における８月下旬のヒノキ球果の口針鞘数調査では、平均 3.3 本／果と７月下旬（同 0.4 本）よりやや増加しています（球果からカメムシが離脱する目安は 25 本／果）。餌となるヒノキ・スギの球果の着果は中程度の状況です。

防除上の注意事項

1) ヒノキ・スギの球果量は中程度ですが、今後局地的な被害発生には注意が必要です。特に山際の園地や過去にカメムシ被害の多かった園地は被害に遭いやすい傾向があります。
2) カキでは早生品種の収穫期に入りますが、富有園の見回りを欠かさず行います。また、収穫期のナシは有袋でも吸汁が可能ですので、発生に応じて適切に防除します。
3) カキなどの収穫期が近いので、防除する場合は収穫前使用時期等の登録内容を必ず確認し、使用基準を遵守します

５．チ　ャ

（１）炭疽病・もち病

予報内容　　発生量：平年並

予報の根拠

1) ８月下旬の調査では、炭疽病、もち病ともに平年並の発生でした。

防除上の注意

1) 秋雨前線が停滞する場合、7～10 日間隔で２回防除します。

（２）チャハマキ・チャノコカクモンハマキ

予報内容　　発生時期：平年並　　発生量：平年並（チャハマキ）
やや少ない（チャノコカクモンハマキ）

予報の根拠

1) 大和茶研究センター（奈良市矢田原町）において、フェロモントラップへのチャハマキの誘殺数、発生時期は平年並、チャノコカクモンハマキの誘殺数はやや少、発生時期は平年並でした。

防除上の注意

1) 早期発見に努め、若齢幼虫期に防除します。

（３）チャノホソガ

予報内容　　発生時期：平年並　　発生量：平年並

予報の根拠

1) 大和茶研究センター（奈良市矢田原町）のフェロモントラップへの誘殺数は、平年並でした。

防除上の注意

1) 更新園、幼木園では新芽が連続して生育するので防除を徹底します。

（４）チャノミドリヒメヨコバイ・チャノキイロアザミウマ

予報内容　　発生量：平年並

予報の根拠

1) ８月下旬の調査では、発生量は平年並でした。

防除上の注意

1) 更新園、幼木園では新芽が連続して生育するので防除を徹底します。

（５）カンザワハダニ

予報内容　　発生量：平年並

予報の根拠

1) ８月下旬の調査では、発生量は平年並でした。

防除上の注意

1) 早期発見に努め、低密度での防除を徹底します。
2) 春から夏にかけての発生が多かった園や更新園、幼木園では発生状況を確認し、発生が認められる場合、薬剤散布を行います。
3) 薬剤の感受性の低下を防ぐため、同一系統薬剤の連用は避けます。

Ⅲ．野菜類・花き類

１．ナ　ス

（１）褐色腐敗病

予報内容　　発生時期：平年並　　発生量：やや多い

予報の根拠

1) ８月下旬の巡回調査では、発生ほ場率 37.5%、発生株率は 1.8%でした。今後の秋雨や台風の接近による風雨で、多発する可能性があります。
2) 今年は梅雨の時期に発生が多かったため、菌密度が高まっています。

防除上の注意事項

1) 被害枝葉および果実は伝染源となるので、早期にほ場外へ持ち出して処分します。
2) 病原菌は水によって伝染するため、ほ場及び畝上の排水を良くし、敷きわらマルチによって降雨による「はね上がり」伝染を回避します。
3) 降雨後に薬剤による予防を励行します。

（２）うどんこ病

予報内容　　発生時期：平年並　　発生量：やや多い

予報の根拠

1) ８月下旬の巡回調査では、発生ほ場率 50%、発病株率 22.3%でした。

防除上の注意事項

1) 整枝剪定によって通風を良くするとともに、発病葉を摘除し埋没処分します。
2) 多発後の薬剤防除は効果が劣るので、発生初期から防除します。
3) 発生ほ場周辺での半促成栽培の育苗は、苗が保菌する可能性が高いので、薬剤による予防を励行します。

（３）ミナミキイロアザミウマ

予報内容　　発生時期：平年並　　発生量：平年並

予報の根拠

1) ８月下旬の巡回調査では、発生ほ場率 36%、発生株率 3.8%でした。

防除上の注意事項

1) 土着天敵を保護しているほ場では、ヒメハナカメムシ類が葉当たり 0.1 頭以上いる場合は防除は不要ですが、ヒメハナカメムシ類が少なく、被害果が増えてきた場合はモベントフロアブルを散布します。
2) 慣行防除を行っているほ場や、カメムシ類防除のために天敵保護を中止したほ場では、ファインセーブフロアブルまたはグレーシア乳剤を散布します。
3) 殺虫剤感受性の低下が進んでいますので、効果に疑問を感じた場合は、各農林振興事務所または病害虫防除所にご相談下さい。

２．イチゴ

（１）萎黄病

予報内容　　発生時期：平年並　　発生量：平年並

予報の根拠

1) ８月下旬の巡回調査では、発生は認められませんでした。
2) 今後も高温が続くと発生は助長されます。

防除上の注意事項

1) 苗床で発病株を認めた場合、ランナーでつながった親株、子苗および周辺株からの採苗は中止します。
2) 地床育苗では、浸冠水に注意します。また、ベンチ又はベッド育苗では、ベッド底部に水が溜まらないよう必ず不織布等を設置し、排水対策を徹底します。
3) 太陽熱消毒後の本ぽは、汚染土壌の持ち込みや浸冠水による病原菌の侵入を防ぐため、農機具や長靴に付いた泥や雨水等の流入に十分注意します。
4) 採苗時には、苗の選別を徹底して、発病株を本ぽへ持ち込まないようにします。
5) 雨よけ施設でのオガクズベンチ育苗では、培地の入れ替えに関わらず、採苗直後の８月下旬～９月上旬または翌年の５月上旬～６月上旬に太陽熱による消毒を行います。

（２）炭疽病

予報内容　　発生時期：平年並　　発生量：やや多い

予報の根拠

1) ８月下旬の巡回調査では、発生ほ場率 10%、発生株率 0.1%でした。
2) 今後、天候不順が続くと発生が拡大する恐れがあります。

防除上の注意事項

1) 定植前までアントラコール顆粒水和剤、ジマンダイセン水和剤による定期的な予防を行います。また、降雨前後や葉かき作業後には、上記の定期的な予防散布に加えて、ベルクート水和剤またはセイビアーフロアブル２０等を散布します。
2) 親株およびランナーや周囲の子苗での発病を早期に発見し、発生部の周囲をシートや古ビニールで被覆後、直ちにゲッター水和剤を散布します。
3) 夜温 25℃以上となる高温・多湿期に多発しやすくなります。罹病性品種の古都華、アスカルビー、章姫等では、苗床が混み合って蒸れないように、必ず株の整理を行います。

4) 多かん水や排水不良による過湿は、本病の発生に好適な条件となるので注意します。
5) 感染株を定植すると本ぽで多発しますので、見かけ上は健全な苗であっても、多発した育苗ほや発病株の周辺からの採苗を避けます。

（３）うどんこ病

予報内容　　発生時期：平年並　　発生量：平年並

予報の根拠

1) ８月下旬の巡回調査では、発生は認められませんでした。
2) 高温により一時的に発病が抑制されていますが、今後気温の低下とともに再び病勢が進展します。

防除上の注意事項

1) 褐色の停止型病斑がある苗床では、秋口から多発しやすいので、葉かきを実施してから早めに薬剤防除を開始します。
2) 薬剤防除時には動噴の圧力をやや低めにして、薬液が葉裏にかかるよう丁寧に散布します。
3) 薬剤耐性菌の出現を防止するため、ストロビルリン系剤やＤＭＩ剤などの同一系統薬剤の連用は避けます。

３．ネ　ギ

（１）ネギハモグリバエ

予報内容　　発生時期：平年並　　発生量：やや多い

予報の根拠

1) ８月下旬の巡回調査では、発生ほ場率 100%、寄生株率 30%でした。

防除上の注意事項

1) ベリマークＳＣの生育期株元潅注処理の効果が比較的高いので、発生初期に処理します。処理薬量が少ないと効果が低いので、ラベルに書かれた濃度、薬量をよく確認して処理します。また定植ネギの場合は、育苗期後半～定植当日に育苗トレイに潅注処理を行います。
2) ベリマークＳＣの生育期株元潅注処理後も発生によく注意して、再発生が見られた場合はリーフガード顆粒水和剤などを散布します。散布の際、ネギは薬液をはじきやすいので、スカッシュ、まくぴかなどの展着剤を加用します。
3) ハモグリバエが多発した残さは次の発生源になるため、できるだけほ場の外に持ち出して処分します。また、多発ほ場の株元土中にはハモグリバエの蛹が高密度で残存するため、次作の前にバスアミド微粒剤などを処理します。

（２）ネギアザミウマ

予報内容　　発生時期：平年並　　発生量：やや少ない

予報の根拠

1) ８月下旬の巡回調査では発生ほ場率 25%、寄生株率 9.0%でした。

防除上の注意事項

1) ベリマークＳＣの生育期株元潅注処理でネギハモグリバエと同時に防除します。また定植ネギの場合も同様に、育苗期後半～定植当日に育苗トレイにも潅注処理を行います。
2) ベリマークＳＣの株元潅注処理後もよく観察し、再発生が見られた場合は登録のある薬剤を定期的に散布します。散布の際、ネギは薬液をはじきやすいので、スカッシュ、まくぴかなどの展着剤を加用します。
3) 一部の地域で殺虫剤感受性の低下した個体群が認められています。防除効果に疑いがある場合は、各農林振興事務所か病害虫防除所にご相談ください。

４．キ　ク

（１）白さび病

予報内容　　発生時期：平年並　　発生量：平年並

予報の根拠

1) ８月下旬の巡回調査では、発生は認められませんでした。

2) ８月の高温により発病が抑制されていますが、今後、秋雨とともに発生が拡大する恐れがあります。

防除上の注意事項

1) 発病株や発病葉は伝染源となるので、ほ場に放置せず摘除し、埋没処分します。収穫後の株も放置せず、同様に早めに処分します。
2) 降雨が続く場合は、早めにジマンダイセンフロアブル等の予防剤で防除します。発生初期には、必ず下葉の発病葉を摘葉してから、ストロビルリン系剤のアミスター２０フロアブル、またはＤＭＩ剤のアンビルフロアブル等で防除します。その後も降雨があれば、上位葉を中心に防除を行います。ただし、薬剤耐性菌が出現する恐れがありますので、同一系統薬剤の連用は避けます。
3) 罹病性品種を収穫後も親株として利用する場合、次年度の伝染源とならないよう、収穫後も継続的に下葉かきと薬剤による予防を行います。

（２）褐斑病・黒斑病

予報内容　発生時期：平年並　　発生量：やや多い

予報の根拠

1) ８月下旬の巡回調査では、発生ほ場率 40%、発生株率 1.2%でした。

防除上の注意事項

1) 密植や過繁茂にならないよう通風を図るよう管理します。
2) 発生ほ場では下葉の発病葉を直ちに除去し、埋没処分します。
3) 発生初期にサンヨール、ダコニール 1000、ストロビーフロアブル等で防除します。

５．野菜類、花き類共通

（１）ハイマダラノメイガ（ハクサイ、ダイコン等のアブラナ科作物）

予報内容　　発生時期：平年並　　発生量：平年並

予報の根拠

1) ８月中旬の低温と多雨により、発生は平年並になると予想されます。

防除上の注意事項

1) 本種は幼苗期に、幼虫が生長点付近の葉や芯を加害します。被害がひどいと芯止まりになり収穫皆無の恐れもありますので、早期発見、早期防除に努めます。
2) キャベツやブロッコリーよりも、ハクサイやダイコンを好む傾向がありますので、後者をよく観察し、防除適期をつかみます。いずれも本葉展開後は特に注意が必要です。
3) ハクサイ及びキャベツ、ブロッコリーでは、育苗後半～定植当日にベリマークＳＣのかん注処理を行います。
4) 寒冷紗や１㎜目合いのネットは、本種成虫に対し侵入抑制効果が高く、有効です。

（２）ハスモンヨトウ

予報内容　　発生時期：平年並　　発生量：やや少ない

予報の根拠

1) 農業研究開発センター（桜井市池之内）のフェロモントラップへの８月の誘殺数は、おおむね平年並で推移しています。
2) ８月下旬の巡回調査では、夏秋トマトで発生ほ場率 33%、ナスで 13%でした。その他の野菜類では発生は認められませんでした。

防除上の注意事項

1) 卵塊や集団の若齢幼虫を発見したときは、摘葉して捕殺します。
2) イチゴではハスモンヨトウが育苗期や定植後のビニル被覆までに産卵し、幼虫が食害します。定期的に観察し、発生を認め次第、プレオフロアブルやトルネードエースＤＦで防除します。被覆前の株整理後にもプレバソンフロアブル５やフェニックス顆粒水和剤で確実に防除します。

（３）オオタバコガ（キク、ナス、トマト）

予報内容　発生時期：平年並　　発生量：平年並

予報の根拠

1) ８月下旬の巡回調査では、発生は認められませんでした。

2) ８月の農業研究開発センター（桜井市池之内）のフェロモントラップ誘殺数は、平年より多く推移しています。

防除上の注意事項

1) 基幹薬剤に対する感受性低下は確認されていませんが、抵抗性の発達を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避けます。

2) 露地ナスで天敵保護に取り組んでいる場合は、プレバソンフロアブル５またはプレオフロアブルを散布します。
3) 果実等の内部に食入している幼虫には、薬剤が直接接触しないので防除効果が劣ります。花蕾や新芽付近をよく観察して、内部に食入する前のふ化～若齢幼虫期に防除を行います。

（４）アブラムシ類

予報内容　　発生時期：平年並　　発生量：やや多い（イチゴ、ナス）
平年並　（キク、トマト、ネギ）

予報の根拠

1) ８月下旬の巡回調査では、発生ほ場率はイチゴ育苗で 56%、キクで 20%、ナスで 25%でした。トマト、ネギでは発生は認められませんでした。

防除上の注意事項

1) 薬剤抵抗性の発達を防止するため同一系統薬剤の連用は避けます。
2) 寄生部位に確実に薬液が付着するように、散布目標を確認してから散布します。
3) ネオニコチノイド系薬剤に対する感受性が低下したワタアブラムシを確認しています。薬剤の効果に疑問を感じる時は、各農林振興事務所または病害虫防除所にご相談ください。

（５）ハダニ類

予報内容　　発生時期：平年並　　発生量：やや多い

予報の根拠

1) ８月下旬の巡回調査では、発生ほ場率はキクで 80%、イチゴ育苗で 46%、ナスで 63%でした。

防除上の注意事項

1) ナスでは、整枝剪定後に、葉裏に薬液が良くかかるように丁寧に防除します。
2) キクでは、葉裏を狙って発生の少ない時期から防除を行います。
3) イチゴでは、苗床や仮植床での徹底防除は難しいので、定植・摘葉後に丁寧に防除します。
4) ナミハダニ黄緑型（白ダニ）の薬剤感受性の低下が進んでいます。殺虫剤の効果に疑問を感じた場合は、各農林振興事務所または病害虫防除所にご相談ください。
5) 施設イチゴではナミハダニの薬剤感受性の低下により薬剤による防除が困難ですので、本ぽでは、天敵製剤による防除を検討します。天敵製剤の導入に際しては使用できる農薬に制約がありますので各農林振興事務所または病害虫防除所にご相談ください。

（６）コナジラミ類

予報内容　　発生時期：平年並　　発生量：平年並

予報の根拠

1) ８月下旬の巡回調査では、発生ほ場率はナスで 50%、イチゴで 18%、トマトで 33%でした。
2) 秋期に増加する傾向があり、他の野菜、花き類でも注意が必要です。

防除上の注意事項

1) コナジラミ類は、多くの殺虫剤に対して感受性が低下しており、オンシツコナジラミとタバココナジラミ類では有効薬剤が異なりますので、防除薬剤の選択に注意が必要です。殺虫剤の効果に疑問を感じた場合は、各農林振興事務所または病害虫防除所にご相談ください。
2) タバココナジラミ類はトマト黄化葉巻病の病原ウイルス（TYLCV)を媒介します。既発生地域のトマト育苗ハウスでは、成虫侵入に注意し、0.4mm ネット被覆を行います。

（７）チャノホコリダニ（ナス、イチゴ）

予報内容　　発生時期：平年並　　発生量：平年並（ナス）
やや少ない（イチゴ）

予報の根拠

1) ８月下旬の巡回調査では、ナスで発生ほ場率 13%でした。イチゴでは発生は認められませんでした。
2) 高温、乾燥で発生が増加しますので注意が必要です。

防除上の注意事項

1) 虫体が非常に小さく、肉眼やルーペでの確認は困難です。新芽部への加害による新葉の萎縮やナスでは側枝の生育不良、果実がく部のコルク状の褐変を観察したら、発生初期の防除に努めます。
2) 新芽部や果実とがくの隙間に寄生することから、充分な薬量を、寄生部位を意識して丁寧に散布します。
3) 摘除した枝葉、果実は速やかに持ち出し、処分します。
4) 服のそでについて移動することがありますので、露地ナスの対面作業を行った後は、そのままイチゴほ場に入らないなど、作業の手順に注意します。

（８）シロイチモジヨトウ（野菜類、キク）

予報内容　　発生時期：平年並　　発生量：多　い　（ネギ）
平年並　（その他）

予報の根拠

1) ８月下旬の巡回調査では、ネギの発生ほ場率 75%、被害株率 11%でした。

防除上の注意事項

1) 本種は、８～９月が発生のピークです。台風の通過後に突発する場合があるので注意します。
2) ネギ、キャベツ等アブラナ科作物を好みますので、特に注意します。また、イチゴの本ぽに侵入すると、冬期に発生を持ち越す原因となりますので定植後の発生に注意します。
3) プレバソンフロアブル５、フェニックス顆粒水和剤等に対する感受性が低下した個体群が発生しているので、防除薬剤の選択に注意します。現在、効果が高いと考えられるのは、スピノエース顆粒水和剤、ディアナＳＣ、コテツフロアブル、トルネードエースＤＦ、ベネビアＯＤ、グレーシア乳剤ですので、**品目毎の登録内容を確認して使用します（作物によっては登録のないものもあるので登録の有無を必ず確認して下さい）**。また、明らかな防除効果不足が見られた場合は、病害虫防除所または各農林振興事務所にご相談ください。

※農薬に関する情報は、令和３年８月 25 日の農薬登録情報に基づいて記載しています。

お問い合わせは
奈良県病害虫防除所
TEL.０７４４－４７－４４８１

その他関連情報は以下をご覧下さい
病害虫防除所ホームページ
http://www.jppn.ne.jp/nara/
奈良県農薬情報システム（農作物病害虫・雑草防除指導指針）
http://www.nouyaku-sys.com/noyaku/user/top/nara